



アルカイド 第四十三春号 目次

〔小説〕

丘の上の阿呆

ゆうづき

無口

母の花壇

落ち葉のころ

蝶子よ

古いサンダル

山田	池	加川	奥畑	船越	多紀	高畠
泰成	誠	清一	信子	恒子	祥子	寛
76	60	56	48	37	30	4





〔エッセイ〕

しばし音楽に癒されて

—— 戻り旅 ——

軽尾たか子

87

陽だまり

木村 誠子

91

枯れない花

奥畑 信子

94

雲と林檎と独り言 (3)

荻野 央

96

アルカイド四十号・四十一号の反響 他

編集後記

同人名簿

104 103 102



■樹林二〇一〇年秋号

(小説同人誌評・佐々木国広)

☆高島寛「桜吹雪」(あるかいど41号)

治は工業高校で、お姉ちゃんと呼ぶ由紀は彼の母の姉に当たり二十四も年上、つまり甥と叔母による往復書簡の形式をとる書簡体小説。……親から大学は工学部へと勧められたけれども、彼は文学部に入り小説を書きたい夢をもっていた。

一方、由紀は離婚し、桜の名所に近い湖北に隠棲した。……治は初めて飛田遊郭に登楼したと第一信(?)。続いて六歳の頃、由紀とくすぐり合いをして遊んだ折、お互いに快感を覚えたという、思い出話を交わしたり……彼の初恋の相手は紛れもなく由紀だった。由紀が三十九歳で結婚するも離婚に至ったのは、胎児がダウン症だと判り、産む産まないかで夫婦の意見が食い違った拳句、中絶したという事由が絡んでいた。……そして彼は名古屋で就職し……。主人公の初恋は純

一そのもので浪漫的心情は強まるばかり。独身となった相手と添いたいと望むが、おそろくそれは成就することはないだろうと予想されるだけに、青年のプラトニックラブを描いたものと読める。

■「季刊文科五一」へ全文転載

☆佐伯晋「白い海へ」(あるかいど40号)

.....

二〇一〇年十月、徳島県三好市で開催された「全国同人雑誌フェスティバル」に、編集人の木村誠子さんと共に参加した。この催しは、富士正晴全国同人雑誌賞授賞式、阿刀田高氏の記念講演、同人雑誌会議、交流会、同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会と、充実したイベントに、日本全国から二百人を超える同人雑誌関係者達が集まった。

会議では、現在の同人誌が若年層の不参加による書き手の高齢化や、また励みになるものが乏しく閉塞感に付きまといられることに話題が盛り上がった。これについて、長年同人雑誌評をしてきた勝又浩氏は「インターネットを駆使した若者

の雑誌は、『文学界』にも『季刊文科』にも『三田文学』にも送られてこない。同人誌評があることも知らないようだ。今まで同人雑誌というのは切磋琢磨の手段であつたが、これからはこういう青年達をも入れてのゲームの時代。権威がいて点数をつけていく合評の仕方ではなく公開選考会のようにして投票で決めていくのが面白い。若者からどんどん投票がくるような作品を書かないとだめ」と。

また「まほろば賞」の公開選考会では作品への活発な討議こそ最重要とし、会場の特別選考委員と一般選考委員の白熱した討議の後に、投票で決定された。

三好市出身の小説家、富士正晴にちなんだフェスティバル。富士の生まれた山里の村は、当日台風の影響で、深い霧と雨の中にあつたが、戦争の弾圧にもめげず個人の湧き上がる創作エネルギーこそ真実のものだと、同人誌編集発行に情熱を注いできた彼の気持ちは、受け継がれていることを感じた。次回は、あるかいど同人全員で参加したいと、気持ちの熱くなった二日間であつた。(祥子)

## 編集後記

●現実にはもう会えない。けど、私のなかにいる。木辺チューターは時折、渋い顔で現れる。「すぐに答えがでるようなものはダメだ。答えが出なくても、長い時間ずっと考え続けることが大事」文校組合後の喫茶店だった。そして帰りの地下鉄。「どうして小説を書かれるのですか？」  
「他になにもすることがないから」  
鋭いいつもの目が悪戯っぽく笑っていた。●不器用だった私は、子供の頃から習い事もひとつ。そのピアノを五十年続けて、「ああ、こうだったのか」と今頃になって気づくことばかり。先生曰く、「ようやくおしめが取れましたね」。この分だと、ひとり歩きができるのはいつたい何歳になることやら。●音楽には「転調」がある。テーマは変わらないけれど、

時間の流れとともに調性が変わる。長調が短調になり長調に戻り、終止形まで微妙に変わり続ける。姉が寝たきりになった半年後、文校に通い始めた。「書く」ことで考えながら、十一年が過ぎた。あの頃には見えなかったことが、少しずつ見えてくるようになった。時間は目に見えないけれど、ひとの意識を変えていく。  
●「あるかいど」の発行が年三回に。合評会も三度になった。うち二回は同人仲間の郷土を訪ねる。夏号は、池戸氏が暮らす郡上八幡へ。さらなる「転調」を重ねて、「あるかいど協奏曲（狂想曲？）」No.43完成。（き）  
●「二十五歳の晩夏のことである」  
「どこかで既に雨が降っているのか、白く光って見あげるようにむくむくともりあがった入道雲の方向で、かなやかな遠雷のとどろきがして居る」  
「私はその頃、アルバイトの帰りなどよく古本屋に寄った」●いずれも、

芥川賞作品の書き出し一行目をつないだものである。（引用順に「城外」小田獄夫、「糞尿譚」火野葦平、「されどわれらが日々」柴田翔）●こうして並べると、一作品の冒頭部分だといつても、さほど違和感はない。肩から力の抜けた自然体の文章で、季節、場所、人物が切り取られていて、読む方も知らず知らず小説世界に入っていける。●かくありたいものだ、と思っただけでも、書き出し一行目に苦勞することの方が多い。  
●それかあらぬか、今号は七作品と少なく、（平均三十五枚）、一〇〇頁程度となりそう。諸氏の筆が止まったのではなく、年三回発行のうち二回まで出稿可という枠を使いきったからだと思いたい。そのため、次号からは年二回までという枠を撤廃する方向だ。どしどし書いていたいただきたい。多くのすばらしい書き出し一行目を今から期待している。（九）